

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 17 号

平成 15 年 9 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三  
電話 045-912-1960

印刷・発送人 〒285-0844 佐倉市上志津原 34 佐藤れん  
電話 043-487-7030

### 内村鑑三「一日一生」より(1)

教文館発行

内村鑑三(文久元年(1861) - 昭和 5 年(1930))

わが国の生んだ代表的なキリスト教の福音伝道者、聖書研究者。「聖書の研究」誌主筆。熱烈な信仰と高潔な人格は、日本の社会に深い影響を与え、その門下からは、日本の現代をになう多くの学者、伝道者、政治家、社会人が輩出した。文章が雄渾で、今日もわれわれに語りかけるがごとくである。

文久元年(1861 年) 3 月 23 日、江戸小石川で上州高崎藩士内村宣之の子として生まれる。

明治 7 年 東京外国語学校(後の東京英語学校)に入学。

明治 10 年 9 月札幌農学校 2 期生として札幌に赴く。12 月クラーク博士の残した「イエスを信じる者の誓約」に署名する。

明治 11 年 アメリカ人宣教師ハリスより洗礼を受ける。

明治 14 年 札幌農学校卒業、北海道開拓使御用掛に勤務。

明治 15 年 札幌農学校 1 期、2 期生有志らと共に札幌独立教会を設立する。12 月、退官し、上京。

- 明治16年 農商務省囑託、水産課勤務。
- 明治17年 3月浅田タケと結婚、10月頃離婚、11月渡米。
- 明治18年 アマースト大学に入学。
- 明治19年 アマースト大学総長シーリー博士より「主を仰ぎ見よ」という信仰を受ける。
- 明治21年 帰国、新潟市にあるキリスト教主義の北越学館に就職(3ヶ月)。
- 明治22年 高崎の人横浜加寿子と結婚。
- 明治23年 第一高等中学校(後の一高)の教師となる。
- 明治24年 いわゆる内村鑑三不敬事件おきる。夫人加寿子永眠。
- 明治25年 大阪泰西学館に就職(7ヶ月)。京都の岡田シツと結婚。
- 明治27年 熊本英学校に就職(7ヶ月)。京都に移り住み、著述。
- 明治29年 名古屋英和学校に就職(3ヶ月)。
- 明治30年 万朝報社に就職(1年5ヶ月)。
- 明治31年 万朝報社退社。東京独立雑誌発行。
- 明治33年 角筈の自宅で聖書研究会を開始。
- 明治36年 日露戦争非戦論を発表。
- 明治40年 住所を柏木に移す。
- 明治41年 柏木の自宅の側に今井館完成。
- 明治42年 一高生を中心とする柏会が結成される。(明治39年 - 大正2年 新渡戸稲造一高校長)
- 明治44年 学生グループによる白雨会が結成される。
- 明治45年 愛嬢ルツ子永眠。
- 大正7年 中田重治らと共に、神田キリスト教青年会館で、キリスト再臨講演会を開く。9月下旬より神田キリスト教青年会館で毎日曜聖書講演会を開く。
- 大正8年 6月より、聖書講演会の会場を大手町衛生会館講堂に移す。
- 大正10年 ロマ書講義始まる。
- 大正11年 ロマ書講義終わる。

大正12年 関東大震災。大手町衛生会館消失のため、聖書講演会は、柏木今井館で、行われるようになる。

昭和5年 3月28日永眠。

#### 主要著書

「求安録」、「代表的日本人」、「世は如何にしてキリスト信徒となりしか」、「後世への最大遺物」、「ロマ書の研究」、「一日一生」、「続一日一生」、「内村鑑三全集」全40巻がある。

なお、山口周三編著「内村鑑三全集感想」もご参照下さい。

1月16日

愛するものたちよ。わたしたちはいまや神の子である。しかし、私たちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れるとき、私たちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿(みすがた)を見るからである。(ヨハネ第1書3・2)

信者は今なお救いの途中においてあるのである。神は彼にありて善きわざをはじめたもうて、これをイエス・キリストの日においてまっとうしたもうのである(ピリピ1・6)。かるがゆえに、われらはいま完全なるあたわずとて、あえて悲しむべきではない。われらはいまは罪の身をもって罪の世にあるのである。われらの外も汚れ、われらの内もまた汚れて、いまは完全は求めてえられざるものである。しかしてかかる状態にあるがゆえに「聖霊のはじめてむすべる実を持てるわれらも、自ら心の中になげきて(神の)子とならんこと、すなわちわれらの体の救われんことを待つ」のである(ロマ書8・23)。しかしてこの待望は空望としておわらないのである。その実現するときは必ず至るのである。キリストの再臨は単に彼の再臨にとどまらないのである。信者の救いのまっとうせらるるもまたその時である。

1月26日

主は知恵を持って地の基をすえ、悟りをもって天を定められた。  
その知識によって海はわきいで、雲は露をそそぐ。わが子よ、確  
かな知恵と、慎みを守って、それをあなたの目から離してはなら  
ない。それはあなたの魂の命となりあなたの首の飾りとなる。(箴  
言 3.19 - 22)

詩人テニソン(注1)の最も注意せし問題は、靈魂不滅、未来存在  
の問題なりしという。故グラッドストン(注2)氏、またこの問題に  
彼の終生の思考をそそぎ、死に瀕する際、バトラー(注3)の「アナ  
ロジー」に評注をくわえ、彼の豊富なる観察と思考との結果を世に  
残して逝けり。政治家にあれ、文学者にあれ、あるいは商売人にあ  
れ、職工にあれ、常にこの世以上の一問題を彼の脳中にたくわえて  
おくことは、彼の品格を高かめ、彼の悟性を明らかにし、彼をして  
俗界の汚気にふるるの憂いなからしむるために必要なり。

注1 アルフレッド・テニソン(1809 - 1892)イギリスの桂冠詩人

注2 グラッドストン(1809 - 1898)イギリスの政治家・首相

注3 バトラー (1692 - 1752)イギリスの神学者、聖職。Analogy of Religion  
の著者として知られる。

1月29日

イエスは答えて言われた、よく聞いておくがよい。もしあなた方が信じて疑わないならば、このいちじくにあったようなことが、できるばかりでなく、この山にむかって、動き出して海の中に入れといっても、そのとおりになるであろう。また祈りのとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう。(マタイ伝 21.21 - 22)

世に金銭の勢力あり、政権の勢力あり、知識の勢力あり、されどいまだ祈祷の勢力にはおよばざるなり。これじつに誠実の勢力にして、山をも透し岩をも砕くの勢力なり。世の大事業となえらるるものは、みな祈祷の力によってなりしものなり。祈祷の力によらずして建てられし国家は虚偽の国家にして、永久不変の基礎の上にすえられしものにあらず。祈祷の力によらずしてなりし美術に、天の理想を伝えうるものあるなし。祈祷は精神的生命をうる唯一の秘訣なり。ゆえに祈祷なきの国民より大政治、大美術、はたまた大文学、大発見、その他大と称すべきものの出できたるべきはずなし。

## 2月8日

だから、明日のことは思い煩うな。明日のことは明日自身がおも  
いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分であ  
る。(マタイ伝6・34)

彼の言語(ことば)は詩歌であった。彼の祈禱は感謝であった。彼の無邪気なる、一日の勞をおえたまえば、颯風(くふう)吹きすさむ波の上にただよう小舟の艫(とも)のかたに枕して寝ねたまえりとのことである(マルコ伝4・37-38)。のみならず、彼が敵にわたさるるその夜、恐るべき死は面前にせまりおりしにもかかわらず、彼は弟子らと過ぎ越しの節筵(いらい)をとともにし、諄々としてかれらに教うる所あり。「彼ら歌をうたいてのち橄欖山にゆけり」とありて、讚美歌をもって彼らの質素なる聖き筵(むしろ)をにぎわしたる事がわかる(マタイ伝26・30)。実に悲哀(かなしみ)の人なりし彼は、同時にまた歡喜(よろこび)の人であったのである。彼はよく悲痛を抑制するの道を知りたもうた。彼ご自身が明日のことをおもいわずらいたまわなかった。彼はいまだかつて世にありしことなき最大の樂天家であった。

2月9日

御言（みことば）を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまで寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。（テモテ第2書4・2）

世に真正の伝道ほど楽しいことはない。これは事業中の事業であって、ひとたびその快味を味わうて、われらは他の事業に転ずることはできない。人の靈魂を救うことである。彼を心の根底よりあらたむることである。あるときは瞬間にして罪人がその罪をすて、神にかえりくるのを目撃することがある。彼の家庭はきよまる、彼の妻子と姉妹とはよろこぶ、彼の生涯の方針はまったく一変する。彼によって新事業が企てられ、かつ成就せられる。一片の福音がかくも深遠なる変化を生ぜしかと思えば、実に驚くばかりである。



2月12日

シモン・ペテロが答えた、「主よ、私たちは、誰のところに行きましょう。永遠の命の言を持っているのはあなたです。わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」

(ヨハネ伝6・68～69)

キリストは世の道徳的宇宙である。世は精神的には彼にありて生き、動き、またある者である。ゆえに余は彼を離れて何事をもなしえない。あたかも木から落ちた猿のごとき者であって、余にキリストをはなれたる余のごとくに憐れなるものはない。キリストに従うは余の利徳ではない。これはいまは余の生存上の必要である。彼をはなれんか、すべての恥辱と失敗とは余を待ちつつある。世がほまれある生涯を送らんと欲せば、世はキリストにすぎるよりほかに道はない。憐れむべき羨(うらや)むべきとは余のことである。

2月13日

しかし、私は今日に至るまで神の加護を受け、このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者たちやモーセが、今後起るべきだと語ったことを、そのまま述べてきました。すなわち、キリストが苦難を受けること、また、死人の中から最初によみがえって、この国民と異邦人とは、光を宣べ伝えるに至ることを、あかししたのです。(使徒行伝26・22～23)

信者の復活の希望は自己によるのではない、主イエスキリストによるのである。信者は人として復活せんと欲するのではない。これが彼が望んであたわざるところである。彼は主イエス・キリストにありて復活するのである。語をかえていえば、キリスト彼にありて復活をくり返したもうのである。信者はキリストの宿りたもうところの者である。しかして「われは復活(よみがえり)なり生命(いのち)なり」といいたまいし彼は、信者の体に宿りてこれおも復活したもうのである(ヨハネ伝11・25)。イエスの霊のあるところにはかならず復活がある。イエスの霊を受けて、復活はこれを自然の結果と見ることができる。

2月15日

さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。(ヘブル書11・1)

信仰は人によっては迷信のごとくに見える。信仰は確かに一種の冒険である。これにしたがって、あるいは失敗におわるかもしれない。しかしながら、信ずるものは信仰の迷信でないことを知る。信仰は心にひびく神の声に対する信者の応諾である。彼は形体(かたち)を見ない、また証明を持たない。しかしながら彼はたしかに信ずるのである。しかり、信ぜしめられるのである。彼にとりては、信仰そのものが見ざるところの物の証拠となるのである。彼は言うのである。われに信仰起れり、ゆえにこれに応ずるの実物なかるべからずと。実物をもって信仰を証明するのではない、信仰をもって実物を証明するのである。これが信仰の力である。この力なくして、信仰はこれを信仰と称するにたりない。

2月18日

その怒りはただつかのまで、その恵みは命のかぎり長いからである。世は夜もすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。(詩篇30・5)

エホバは怒りたまわざるにあらず。われらに刑罰の臨まざるにあらず。されどもこれただ暫時のみ。彼の恩恵(めぐみ)は延びて終生にわたるなり。懲罰は例外なり、しかして恩恵は常則なり。涙は時に浮かばざるにあらず、されどもこれ単に旅人(たびびと)の一夜を我が家にすごすがごとし。朝来たれば彼は去り、しかして歡喜(よろこび)は彼に代りてとしえにわれと共にすむなり。苦痛は暫時のみ、歡喜は永久なり。涙は旅人のごとくして去り、感謝は家人のごとくにして来たり住む。しかり、歡喜は朝と共に来たらん。旭陽、暗黒を排して昇るときに、わが唇に讚美の声あがる。